あったかいココアと俺

ろぜった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あったかいココアと俺

【Ｎコード】
Ｎ００６８Ｊ

【作者名】
ろぜった

【あらすじ】
夢のない大学生統真（すべるま）　統間（とうま）
これは彼が夢を手に入れ、さらに彼女も手に入れる妬ましい物語である？

第一話（前書き）

はじめましてこんにちは。
ろぜったです。
男です。
初投稿です。
なので誤字脱字等目立つ可能性大ですが、大目に見ていただきたいです。
一先ず読んでみてご判断を。

第一話

9時

「やはり冬にはこたつですなぁ」

一人暮らしの私はテレビに向かって話しかけた。

「今日の最低気温は…」

ぷつっ

とテレビの電源を切った。

寒い、滅入る、最低気温。

仲良しのテレビとはお別れして、暖房で部屋が暖まるのを待つ。

シラけた空間に一人ぼっち…ひもじい。

外には枯木と落ち葉と、冷えた空気しかないようで、まだ早いこの時間、生物がすべて冬眠してまったかのように、外には活動する者はいない。

そんなことを考えながら私は和む、お爺さんのように動かず炬燵から冷めた温もりを感じる。

人肌が恋しい。

大学が休みで特に用事もない日曜日、夢もなく、金もなく、恋人もなく。

友人は多い。が、未来を見る輝く目には、私はいつも置いてきぼりだ。

有名大学に入学しても、やりたいことがなければ何もしないのと同じだ。

せっかくアパート借りてくれた親に大変申し訳ない。

昔諦めたミュージシャンの夢を追いかける方がまだ人間としてよかったのかもしれない。

今更考えても無駄なんだけどね、浪人して大学入ったから…

等等、考えているうちに部屋が暖かくなり目が覚めたので料理を始める。

ご飯をよそりながら、冷めた昨日の晩飯を温める。

簡単に温まった。

飯を食べる。腹の減りに関してはすぐに満たされた。

１０時

身支度をして、なにもない家を出た。

町では車が走る音がよく聞こえた。

目的はないが家よりマシだと外に出たがこの寒さに後悔。

なにもない住宅街をさらに味気なくする。

暖かさをもとに駅へ向かう。

バスならすぐに着くが、歩いて向かうことにした。だって暇なんだもん。

しかし、すぐに後悔した。お分かりの通り寒いからだっ。

めげず、ココアを買い（甘党、コーヒーは未だ飲めず）暖まりながら（無論あったか～い）行く。

いまどき冷た～いなぞ売れるものか。

しばらくして大きめの公園に着いた。

子供は風の子元気の子。エネルギーの塊のように走り回っている。

眺めながらココアでも飲むかと思い、飲みやすい温度のココアを開ける。

１９才ながら爺さんやってまぁす。

のんびりまったり。夢もいつか出来るだろう。

と、いつものように後回しにしていると。

女の子が泣いている。

ガキの喧嘩と思い、様子をみていると、

「おまえ、ようちえんでいっつもひとりだよなぁ」

「かーちゃんむかえにこねーしなぁ」

「おまえみたいなうじうじくらいやつは、かーちゃんにもかまってもらえないんだろぉ」

「やめてよぉ〜」

酷い言われようだと思いさすがにたすけなくてはと立ち上がる。

「コラー、イジメはよくないんだぞ。女の子にあやまれ」

「ヒーローぶんなよオッサン」

「あいつがわるいんだぞ」

「めんどくさいからあっちいこ〜」

うぜーなガキども…19才ナメんな。まだ若いぜでも一安心だ。

「大丈夫、怪我とかないよね」

「っぐ、だい、じょうぶ、けがは、っぇぐ、ない」

頭を撫でながら落ち着くのを待つ。

「だけどいったいどうしたのかな、よかったら聞かせてくれない？」

うっとうしいかもしれないが、子供は元気に仲良く遊ぶべきだ。大人からの助けも多少必要だと思ったから、彼女に聞いてみた。

「私のお母さん、お仕事で帰るのが遅いの。だから幼稚園帰るのも一人ぼっちなの。」

保育園に預ければ良いのではないだろうか。なんて思ったが、私立の幼稚園のようなので、そんなわけにもいかないのだろう。

しかし、そんなことでイジメるなんて最近のガキは…あっ、俺もまだガキだから勘違いすんなよ。

「皆と仲良く出来るようにするにはどうすればいいかな。」

聞かれたが、彼女に悪気は無く悪いことしてるわけでもないから、

「今のままでいいんじゃないかな。」

と言った。

「えっ、なんで」

「君は何も悪くない。イジメる奴が悪いんだ。だから、気にしないで違う子と仲良くすればいいんじゃないかな。仲良い子、一人ぐらいいるでしょ。」

「うんっ、あきら君と仲良いんだよ。」

「じゃあ、あきら君と仲良くして、そしたら遊ぶひとがだんだん増えてくはずだから。」

「そうなのかな…」

「大丈夫、お兄さんにまかせなさい。またなんかあったらお兄さん呼びなさい。」

そう言って彼女とわかれようとした。

第一話（後書き）

如何でしたか？
面白かったですか（少し期待！）
でしたらこれからも見てくださいね。

第2話

「待って…ひとりぼっちはやだ、
少しだけいっしょに遊んでよ」

「んーと、暇だから良いよ、ココアでもあげるから一先ず飲んどきなよ」

「ありがとう。
…
ぬるいよ、このココア」

「しょうがないだろ、ちょうど良い温度で開けたのに、泣いたお前がやって来たんだからさ」

砂遊び、おままごとなんかをして昼まで過ごした。
彼女の名前は奏（かなで）というらしい。幼稚園に行っているが、親は働いているためになかなか会えず、さらに両親は離婚して母子家庭であるらしい。

「昼飯はどうするの？家で食べるの？」

「う～ん。
お兄ちゃんとお外で食べたい！」

「家にご飯が用意してあるんじゃないの？だったら食べなきゃ」

「やだ～」

うーん。家に上がるのはまずいよな。女の子だし（？）

「また遊ぶからそれで勘弁して、来週も同じ時間に…１０時ぐらいに公園に来てよ」

「うーん。
絶対だよ。忘れたらだめなんだから」

「じゃあ指切りしようか」

「うんっ。ゆーびきーりげーんまんっ…」

「じゃ、一応携帯の電話番号あげるからなんかあったら連絡してよ」

「わかった～。
バイバ～イ」

なんか疲れた…
だいたいなんでおままごとで、爺さん、父さん、子供……の役やらねばならんのだ。（奴は母役だけ）
なんでモアイ像砂で作らねばならんのだ。

来週サボろうかな…

1時

「え～っ、そんなことがあったの。絶対来週も行かなきゃだめだよ。あたしも一緒に行こうか？」

駅前にある喫茶店”フォルテ”で昼飯を食おうと思っていたら、奴がバイトにいた。

「…めんどくさい。」

「なんか言った？今日はたまたまシフトが入ってたけど、普段はないから…かわいそうじゃん」

「親が見たら誘拐と間違えるかもしんないよ…」

「あ～もう。うるさい。これは決定事項よ。瞳ちゃんにまかせなさい。」

というカンジに決まってしまった。彼女は目黒瞳。ゴツい感じな名前が嫌なそうで…

彼女は俺と同じ故郷で、高校が同じだったが、浪人した俺と違い、現役で合格。

ある出来事でばったり再開した彼女は、高校では関係は全くなかった（俺は知らなかった）が、今は俺とよくつるんでいる。

「だいたいあんたは昔から鈍臭いし、面倒くさがりだし…」

「うっさいな。っていうかバイトなんだからしっかり仕事しなさいな。”人がいなくても”掃除とか、皿洗いとか、肩もみとか、イロイロあるだろ。」

「わざと人がいないを大きくいったな〜。それってマスターに対する…」

「侮辱じゃないかな？それに肩もみは仕事じゃないよ。むしろ僕にやって欲しいかな、瞳ちゃん」

「びっくりさせないで下さいマスター。俺という客ですら居なくなっちゃいますよ。」

「僕には瞳ちゃんがいれば大丈夫なのさっ。」なんつーセクハラ…彼は”フォルテ”のマスター。年齢、実名等は知らない。性格は変態だ。でも頼りになるから、なんだかんだいって皆に慕われているようだ。

「マスターセクハラ〜。店員もいなくなっちゃいますよ〜。」

「それはいけない。私としたことが。瞳ちゃんがいないと僕は生きていけない…店をたたんで死のう。」

「いやいや。しないでよ、私給料欲しいから。」

「じゃあ統間君に給料になってもらおうよ。」

「はぁ～？なんでこんなやつに給料にっ…てマスター、またセクハラじゃないですか。」

「べっ、別にそんなつもりで言ったんじゃないんだから～。それに瞳ちゃんは統間君が」

「わ～わ～それ以上はＮＧ。」

うっせ～。まあ賑やかで楽しいし、いつものことなんだけど、

「昼飯食ったから帰ります。じゃあ。」

うっせ～。まあ賑やかで楽しいし、いつものことなんだけど、

「昼飯食ったから帰ります。じゃあ。」

第2話（後書き）

更新遅れてすみません。学生なもんで時間が…
これからはなるべく早くしますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0068j/

あったかいココアと俺

2010年10月9日18時28分発行